

【書 評】

羽田 正・三浦 徹編

『イスラム都市研究』

—歴史と展望—

東京大学出版会 1991.7 vii+363 ページ

1988年から3年間にわたり、板垣雄三氏(当時東京大学教授)を代表者とする、文部省科学研究費重点領域研究「比較的手法によるイスラームの都市性の総合的研究」——通称「イスラームの都市性」研究プロジェクト——が組織された。この研究プロジェクトの目的は、組織者たちによってイスラム社会に典型的に観察されるとされた「都市性」——必ずしも明確に定義されたわけではないが、評者の理解する限りでは、「都市空間に普遍的な生き方」ぐらいの意味である——をキーワードに、これまでの人間社会を比較検討し、人間社会の将来を文明史的に見通すことであった。そのため、都市の景観、政治・経済・社会構造、そこでの宗教、生活文化、さらには都市のコスモロジーなど、23の研究テーマが設けられ、イスラム社会を研究対象とする者を中心として、人文・社会科学はもとより、建築やコンピューター民族学まで、129名の研究者が参加し、さらに、関連テーマについて、2度の国際シンポジウムも開催された。この大研究プロジェクトは、少なくとも組織者の意図のなかでは、都市空間のみを研究対象とするものではなかったようであるが、プロジェクトの題名から容易に想像されるように、そこでは、都市空間がもっぱら研究の対象とされ、そのさまざまな側面について、討論が積み重ねられた。

本書は、かかる討論によって生み出された成果の一つであり、イスラム社会研究の第一線において活躍している若手・中堅研究者の手になる、包括的なイスラム都市研究史の回顧とテーマ別研究動向の紹介である。本文は、マグリブと呼ばれた北アフリカ(私市正年)、マシュリクと呼ばれたエジプトを含む東アラブ(三浦徹)、トルコ(林佳世子)、イラン(羽田正)、中央アジア(小松久男)というイスラム圏の五つの中心的地域ごとに構成されているが、その前後に、二人の編者による、地域横断的な本書の意図と総括を述べた、序章「イスラム都市論の解体」(羽田

と終章「都市研究の再構築にむけて」(三浦)が置かれている。

本文の叙述は、一方では、各地域の研究事情、史料状況、他方では、執筆者の問題関心の違いから、必ずしも統一されたものではない。つまり、マグリブについては、欧米におけるいわゆるイスラム都市論のパラダイムの多くが、植民地時代におけるフランス人オリエンタリストによるマグリブ都市研究のなかから形成されたこと、そして、その過程でイスラム都市論における諸々のオリエンタリズム的偏向が再生産されたことを摘出す点において鋭い。また、同じく欧米研究者のイスラム都市論に研究材料を提供してきたマシュリクについては、オリエンタリズム的偏向を指摘しながらも、それを乗り越える、欧米ならびに現地での近年における新たなパラダイムに注目しつつ、研究動向の交通整理を行なっている。これに対して、アラブ地域ほど欧米のイスラム都市研究の対象とされなかったトルコとイランについては、論争的なパラダイム批判という側面は薄れ、それぞれの地域の都市研究についてのよく整理された研究動向の紹介となっている。すなわち、トルコについては、研究史料を含めた、多くの現地研究者によるトルコ語文献の紹介に努め、イランについては、フランスを中心とした欧米でのイラン都市研究を回顧し、オリエンタリズム的偏見を越えて、新たな都市研究の地平をひらく、地理学的、考古学的都市調査の成果に注目している。そして、長らく旧ソ連邦の学問的影響下に置かれた中央アジアの都市研究については、マルクス主義歴史理論に立つ都市研究から歴史考古学的な研究まで、豊富なロシア語文献の紹介において異色である。

しかし、このような回顧、展望における力点の違いをこえて、この本文の叙述において印象的なのは、これまでのイスラム都市研究の蓄積の膨大さ、そして、それを整理した形で紹介しようとした、無謀とさえ思える執筆者たちの心意気である。実際、各地域の文献として挙げられているのは、それぞれマグリブ322点、マシュリク427点、トルコ249点、イラン218点、そして中央アジア149点である。これらは、執筆者たちによっていわゆるイスラム都市研究として厳選された文献の点数であって、これに前イスラム時代、近現代のイスラム社会の都市についての文献を加えるならば、いかに多くの業績が、イ

スラム社会の都市に関して積み重ねられてきたかが理解されよう。本書の末尾には、本書で挙げられた文献について、研究者名、都市名、用語ごとの索引がつけられており、本書が今後のわが国におけるイスラム都市研究の手引きとなることは、疑いない。

ともかく、このように文献が多いという事実は、いかに研究者、とりわけ欧米の研究者にとって、イスラム都市が想像力をかきたてる対象であったかを示している。実際、前近代におけるイスラム社会の商業的、都市的性格には際立ったものがあつた。このことは、14世紀の後半に生きた、イスラム世界を代表するアラブの歴史家、イブン・ハルドゥーン(1332-1406年)がその名著『歴史序説』のなかで、技術と貨幣、つまり情報の蓄積でもって都市を定義していること一つを取り上げてみても分かる。イスラム世界では、都市は形成されるものではなく、常に存在するものであり、それ故、まず都市ありきの世界に生きたイブン・ハルドゥーンにとって、閉鎖的な自給自足経済など考えも及ばなかつたのである。こうして、前近代のイスラム世界は、ヨーロッパ社会をモデルにしたものであれ、日本社会をモデルにしたものであれ、等質的な共同体を前提とした共同体内倫理の延長線上に社会の秩序原理を求める閉鎖的な農業社会とは異なる、異質な人間集団、文化体系を包括し得るような共同体間倫理の延長線上に社会の秩序原理を求める開放的な商業社会としての性格を色濃くもっていた。

ところが、本書の最大の問題提起がいわゆるイスラム都市論の解体宣言であることは、誠に皮肉である。ここで、批判の対象となつたイスラム都市論とは、イスラム社会の都市を論じるに際して、その時間的、地域的な偏差、多様性を捨象して、ヨーロッパ都市に対して、安易に「イスラム都市」という二項対立的な用語を持ち出す認識の方法、言葉を換えれば、ヨーロッパ世界がイスラム世界を植民地化する過程で、ヨーロッパ人が自己中心的世界観を確認するために、そしてそのためだけに、近代市民社会の揺籃の地、ヨーロッパ都市とは本質的に性格を異にする、それ故に、東洋の後進性を証明する題材としてイスラム都市を取り上げるといふ、研究方法におけるオリエンタリズムの偏見である。つまり、平たく言えば、他の世界の都市については、キリスト教都市、ヒンドゥー教都市、仏教都市、儒教都市など、宗教、イデオロギーの名を冠して都市を呼ぶ習慣がないのに、なぜイスラム世界の都市についての

み、このようなことが認められるのか。イスラムという宗教は、他の宗教と異なり、都市の性格をも規定する影響力をもつたのか、ということである。そして、この問いに対する本書の執筆者たちの答えは、はっきりと「否」というものである。

評者は、この執筆者たちの見解に基本的には賛同する。しかし、同時に、それではこれまでのあの膨大なイスラム都市研究の蓄積は一体何だったのだ、という感慨を禁じ得ない。思うに、本書の執筆者たちの思考パターンにある種の堅苦しさを感ずるのは、かれらがストイックに研究対象を狭い都市空間に限定しているからであろう。かれらは、都市の独自の生活空間としての性格を否定し、都市を社会のマイクロコスモスとして、社会に溶解させる分析視角に対して、過剰とおもわれるほどの否定的反応を示す。そして、たとえば、都市と農村、遊牧社会などの他の生活空間との関係について精緻なモデルをつくって、それに基づく比較都市論を構築しようとする。しかし、評者には、何も精緻なモデル化を指向せずとも、たとえば中央アジア・イラン都市とアラブ都市の差異などは、都市をその生態的、文化的、歴史的環境に置き直してみるだけで、自明のこととして取り上げるまでもないように思われる。

また、ヨーロッパ都市との比較についてもそれほど神経質になる必要はないと思われる。というのも、狭義の比較都市研究としてではなく、なぜあれほどの高度な商業的、都市的社会であったイスラム世界が自ら近代資本主義を生み出し得なかつたのかという、少々古くさくはなつたものの、われわれが近代に生きている以上、依然として重要な問いのもとでは、ヨーロッパ都市との比較は歴史研究として有効であろうからである。さらに、評者には、イスラム都市という用語にもそれほどの違和感はない。というのも、閉鎖的な農業社会をモデルにした、共同体内倫理に基づく社会観の限界が明らかになつた現在、文明論的にみて、共同体間倫理に基づく開放的な商業社会であったイスラム社会は面白い研究材料を提供すると思われるが、かかる視点のもとにあつては、イスラム都市という用語には想像力をかきたてる響きがあるからである。

以上、本書のラディカルな問題提起に触発されて、思いつくまま、現在評者が考えていることの一部を述べてみた。

[加藤 博]